日韓発掘調査交流に参加して

大韓民国慶州国立文化財研究所との間にかわされた日韓発掘調査交流の一環として、約１ヶ月間奈良文化財研究所に滞在された李柱憲先生と兪洪植先生から研究交流に参加した感想をいただきました。

2008年１月21日午前９時50分、寒い冬の真っただ中、大きな轟音を響かせて釜山空港を発った飛行機は、いつのまにか関西国際空港に到着した。空港から都城発掘調査部飛鳥・藤原地区へ向かう途中、車窓から雪に覆われた生駒山地と二上山を見ることができた。その風景は非常に印象的で、私がよく目にする韓国の雪景色とはどこか違う印象を受けた。

研修では、発掘調査（甘樫丘東麓遺跡、平城宮東方官衙）への参加、遺跡見学・資料調査（吉野ヶ里遺跡、九州国立博物館など）をおこなった。

滞在期間中、最も印象深かったのは高松塚古墳シンポジウムへの参加である。高松塚古墳シンポジウムは、２年間にわたる高松塚古墳石室解体調査の報告会で、石室解体過程と、発掘以後の古墳と壁画の状態、そして今後の壁画の保存方針と遺跡整備計画について報告がなされた。そこは直接作業を遂行した関係機関の責任者たちが、古墳の解体と復元の必要性を一般市民に説明し、理解を高める場であった。800人を越える市民たちが報告会のために集まり、高松塚古墳の未来を思いつつ真摯に聞き入っていた様子は、まだ私の脳裏に鮮やかに残っている。特に、この日の行事は1949年法隆寺金堂の火事を契機に制定された文化財防火デーにおこなわれたもので、文化財に対する日本人の幅広い眼目を直接感じることができる機会でもあり、いっそう意味深く感じた。

（国立慶州文化財研究所　李 柱憲）

平城第429次調査現場にて（中央が李 柱憲先生）